琉球大学学術リポジトリ

沖縄におけるペルー日系人の文化変容

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 国吉, サオリ, Kuniyoshi, Saori
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010172

沖縄におけるペルー日系人の文化変容

国 吉 サオリ

1．はじめに

沖縄県からは戦前戦後に多くの人が移民として世界へと出ていった。1980年代後半頃に、日本へのデカセギブームに加え、ペルーの経済不況や治安の悪化が目立ち、移民の子孫である日系人の多くが祖先の地を求めて戻ってきた。そんな彼らは、沖縄に10年以上と長期滞在し定住してきている。この章では、ペルー日系人がペルーで身に付けた文化が越境によりどのように変化したのかをみていくことを通して、沖縄に定住する外国人が抱える文化の問題を考えてみたい。その際、ホスト社会に入ってくる者をホスト社会の価値や行動様式への適応へと押し流す文化支配のメカニズムを明らかにしたい。以上のことから、「生活様式としての文化」がアイデンティティを表象する側面に重点を当ててみようと思う。この視点について、谷富夫氏の言葉を借りると「民族の自他を区別する為の目印を文化指標(cultural marker)という。例えば、アメリカ社会でもっとも重視される文化的指標は言語、宗教、膚色などである。在日韓国・朝鮮人の場合は、名前、言語（朝鮮語)、国籍などである。しかし、通名＝日本名を使用している人は全て朝鮮人としてのアイデンティティが稀薄であるとは限らない。指標機能を持つ『文化』は他にもたくさんある」[1] と説明している。その為に、個人の生活にもっとも基礎的な社会領域と考えられる、家庭生活、友人関係、エスニック・ネットワークへのアクセスに注目し、彼らの生活様式としての文化を探っていく。今回の調査は、12人の対象者に加え2004年度に入って筆者自身が調査を行なった2人の方々を合計して14ケースと少ないものである。また、機縁的に探した場合も多く、調査結果にある程度の偏りがあると思われる。分析する際に対象者のプライバシーの為名前を伏せ番号で呼ぶこととする。また、対象者の番号にペルーという意味でＰと記述する。

2．分析から見えてきた生活様式としての文化と民族関係

(1) 家庭生活

対象者全員、ペルーでの家庭言語はスペイン語であるが、祖父母や1世の両親の影響により日本語の挨拶や片言の単語を生活の中に取り入れられていた。ペルー社会で暮らしながらも、彼らは特に小さい頃に凝縮した日系社会で生活し、「正直」「勤勉」「清掃」「礼儀」の4つの柱をもとに家庭で子供達をしつけた。そのなかで、「日本人以外と遊ぶな」などとその後の人生の人間関係をめぐるしつけも取り入れられていた。それは、移民者がペルーに来た当時の差別体験の記憶が反映しているのではないかと思われる。更に、ウチナーンチューなのかナイチャーなのかと出身地にも拘りがあった。しかし、「誰とでも対等に接しなさい」という例外のケースもあった。現地のペルー人と異なる家庭文化として、仏壇があった。それは、親戚を中心に集まり、特別な時にしか出されない日本料理（主に沖縄料理）が出されるものであった。しかし、対象者全員にとって関心をひかれるのはご馳走料理であった。彼らは家族揃って食事を取るこ

とを習慣にし、親戚とはタノモシや仏壇関係の行事だけでなく、頻繁に会って、非常に親しい親戚関係を築いていた。しかし、沖縄に来ると両親や夫婦が共働きし、子供たちが平日だけでなく週末まで部活やアルバイトなどで家に帰る時間が遅かったり、お互いの休みが合わなかったりする。結局、家族で過ごす時間が減り、ペルーで築いた家族関係が持てず、その結果としての親子間でのコミュニケーション不足が様々な面に影響しているようである。そのことに関して、日本での生活のリズムに不満を隠せない人は何人もいる。だが、家族の安全性を心配しなくてはならないペルーよりも治安の良い沖縄の方が暮しやすいのだという。沖縄生活でゆとりの時間の無さは日系人の家族生活のあり方を変化させているのであるが、全てのライフスタイルが変わったわけではない。彼らは今でも、沖縄においてペルーからの親戚との繋がりを維持しているのである。また、調査した中では、沖縄の親戚と仏壇関係や結婚式以外の行事でもモアイなどを通して親戚との交流を図っている人もいる。家族での過ごし方が変化したあとの穴埋めとして、ペルーからの親戚との交流が位置づけられている為、ペルーからの親戚との関係性のあり方は沖縄でも維持されているようである。また、文化的行事としてのモアイや仏壇関連行事は日系人と沖縄の親戚との交流の場を提供しているようである。では、文化の基礎的社会領域として考える人間関係について次でみていく。

(2) 友人関係

学校生活での友人関係をみると、日系学校に通っていた人は日系人の友人が多くいる一方、国立学校に通っていた人は現地の人の友人が多くいた。例を挙げると、P2は中学校2年の時国立学校からラ・ウニオン校に転校したが、日系人の価値観のズレと学生の雰囲気に慣れず、他の学校で友達を作って中・高校生生活を過ごしたとのことである。その逆の移動をしたケースでは、P14は沖縄に来る前、小学校4年の頃にラ・ウニオンから小さな国立のカトリック学校に転校し、そこで人間関係に関してたくさんのことを学び、ラ・ウニオンよりも楽しく過ごしたと語る。P14は学校から遠くに住んでいたこともあり、授業を終えるとすぐ家に帰っていた為、学校の外で同級生と接したことは無いという。P4の場合は日系学校に通いながらも日系人よりも現地の人と遊ぶことが多く、日系人とは沖縄県人会館でサッカーをして毎週日曜日だけ遊んでいたという。ペルーではサッカーは国のスポーツとされる為階層や肌の色に関係なく少年から大人まで幅広く好まれるスポーツである。P4はごく普通の少年と同じようにサッカーが好きで、サッカーに没頭する時間が多く、放課後隣近所の現地ペルー人とサッカーをすることは日常の習慣であった。そこで彼らと友好関係を作り同じサッカー仲間として彼らと接した。その逆に、P10は私立の学校に通いながらも現地のペルー人と遊ぶことは無く、日系人だけで遊ぶことが多かったという。P10が通っていた中学校はﾄﾞｲﾂ系の学校であり、生徒の60%から70%はﾄﾞｲﾂ系、15%から20%は日系と中国系、現地のペルー人はわずかに10%であった。また、小学校は日系学校に通っていたこともあり、休みの日は日系学校からの友人と集まって、ラ・ウニオンに遊びに行っていたという。大学・専門学校や予備校に通った人は、エスニックグループの壁を越えて日系人に限らず幅広く友人関係を築いているが、そのときに、小・中・高まで日系学校に通っていた人は新しい環境で現地ペルー人との接し方に戸惑ったとのことである。日系学校でもペルー人と友人関係があっても、日系学校にいる現地ペルー人は

ある程度日本人のハビトゥスを知った上での接し方であり、何らかの形で彼らに合わせて接していたことから、異なる環境でのペルー人と接する際戸惑いを隠せない状況にあった。

移民者たちが築きあげた日系社会で彼らは、祖国から持ち込んできた文化・習慣・道徳・価値観の子孫への継承を図っていた。その為、世代によって異なるがペルーにいる頃から沖縄への憧れや親近感を持ち、沖縄に特別な想いを抱いていた人こそ、沖縄社会の受け入れ姿勢に失望するのである。現実を目にした彼らはペルーでイメージとして出来あがっていた日本人像が崩れ、ペルーと異なったかたちの人間関係が結ばれていくようになった。現在、沖縄にやってきた対象者の全員に、日系人・日本人両方の友人がいる。また、ラテン系の人とも関係を持つ人もいる。こうしてみると彼らは越境により、以前にあった"日系人"から脱皮し、外の世界をみつめ直し、広い視野をもって人間関係を築いているように思われる。確かに、P6 を除いて全員は日本人よりも日系人の友人と過ごす時間がはるかに多い。しかし、それは 80 年代後半～90 年代半ばの頃と違って組織的な結束力の強い集まりではなく、気の合う友人同士で、そこには日本人も含まれる集まりだったりする。彼らは、集まって食事をしたり、世間話をしたり、踊ったりして一緒の時間を楽しむのである。特定した場所は特に無く、誰かの家であったり、海であったり、どこかの駐車場であったり、サルサバーであったりする。しかし、頻繁ではないが彼らが共通して足を運ぶ場所としてDレストラン・Pレストラン・北谷のナイトフリーマーケットやサルサバーがあげられた。世代によって集まる場所は異なるが年齢を問わず幅広く利用されるのはPレストランとDレストランである。また、若い日系人が良く集まる場所はサルサバーである。そこで、ラテン音楽にのって踊り、ペルーの国民性が持つユーモアのセンスで会話し、仲間に囲まれて彼らが持つ独特な雰囲気をつくり、またそれを楽しむのである。彼らは日本とペルーの両文化がバックグランドにある以上周囲との文化や意識の違いを当然感じることがある。それは、ペルーの人は「ずるい」「怠け者」「テーゲー主義」「リベラルな性格」「盗み」「人への気遣いが無い」とあげられた。また、沖縄での人間関係における文化や意識の違いをも感じている。P6 以外の全員が文化や価値観の違いを感じている。具体的にみると「男女の付き合い」「ユーモアの違い」「笑うツボの違い」「楽しみ方」「家族の繋がり」「食事」「祝いの仕方」「金銭的価値な観」「人との接し方」「物事を垂直に言わない」「仕事に取り組む姿勢」「本音と建て前」などである。こうしてみると、彼らは「男女の付き合い方」「ユーモアのセンス」「人との接し方」「家族の繋がり」などという人との接し方、人間関係のあり方の違いを感じているのである。彼らは、ペルーで日系社会のなかで暮らしながらもペルー的な人間関係のあり方を築いていたようである。このように彼らの間でしか理解し合えない文化や意識を顕在する場所としては、家庭以外にエスニック・ネットワークであると考えられる。そのことに付いては以下でみることにする。

(3) エスニック・ネットワーク

今回の結果から、殆どの対象者はラ・ウニオン校あるいはラ・ビクトリア校のどちらかの日系の学校で教育を受けており、その他の人ではラ・ウニオン運動所に通いそこでスポーツし、またそこで開催されるダンスパーティに友人や従兄妹と一緒に参加していた。学生ではない人でも施設内にあるレストランやカフェなどを利用する目的で会員となったりする。そこで、モ

アイや婦人会の集まりが催されていた。また、沖縄県人会を利用するのは1世や2世が多く、ゲートボールや紅白歌合戦を観る為に足を運んだりする一方、ラ・ウニオンと比較して少ないが若い世代は、サッカーをする為に通っていた人もいる。先にもでたが、日系人同士でモアイをしていた。(現地ペルー人も一緒にモアイに参加するケースもあった。) この結果からは全員が何らかの形でエスニック・ネットワークに加わっていたことが分かる。

沖縄に目を向けてみると、エスニック組織に関わっている対象者は14人中8人であった。昔は参加していたが今はしてないという人もいる。残りの6人は日系のサッカーチームに属していたり、コザペルー会に参加したりする。サッカーチームはＯＩＣの海外研修生や米兵チームと試合をしながら国際交流を図っている。コザペルー会は、ペルーに移民した1世やその子孫を迎える為の親睦会が始まりで、ペルーの独立記念日パーティを開催している。今日では、全島に広がる300人近くの会員がいる。コザペルー会の会員2世は協会の行事と別で月に一回にモアイをして集まっている。現在、エスニック組織への参加は2世が積極的に活動しており、その次の世代である3世・4世の参加は殆ど見られない。対象者の語りでは、「興味が無い」「活動の内容が分からない」「存在を知らない」などがあった。先述したように、日系人は以前にあったエスニック組織というフォーマルな集まりから気の合う仲間同士で集まるようなインフォーマルな形に変わっている。それは、ペルーであったような機縁に限られたものではなく、日本人も含む開かれたネットワークが図られているのである。次の項目では、これまで見てきたような生活様式としての文化の変容が彼らのアイデンティティにどのような影響をもたらし、またアイデンティティがどのように変容したのかをみていく。

(4) アイデンティティ

ペルーでは自分を「日本人・日系人」としての意識があったと答えた人は、14人中6人、なかで、「複雑な感じ」「バラバラ」と思っていた人もいた。「ペルー人」と答えた人は14人中6人、しかしここでも、はっきりとした自覚ではなく「分からないでも、ペルー人」「自分でも、知らないでもペルーに生まれたからペルー人」「深く考えたらどっちでもない感じがするけど、ペルー人」どっちつかずの立場がみられる。また、「考えたこと無い」「特に意識したことが無い」と答えた人は14人中2人P13とP14であった。2人に共通する点として、家族や親戚に囲まれた環境で生活していたことと、小学校中退で沖縄に来沖していることがあげられる。家族や親戚以外の人と接する機会といえば学校での授業時間に限られていた。放課後や休日は殆ど家族や親戚と一緒に過ごしていた。つまり、家庭環境の外での生活経験はなく、現地ペルー人との接触が殆ど無かった。よって、アイデンティティを自覚するための重要な役割をはたす「他者」との出会いがなかったとみられる。P14は、沖縄に来る前ペルーの国立の学校に転校している。そこで初めて周囲から「ハポネシタ」(日本人) と言われ、周りから“見られる”体験を初めてするのだが、学校生徒の受け入れが良くすぐに解け込んだのである。P14の場合は現地ペルー人との衝突も無く、教室で周りに助けられアイデンティティを特に意識せずに過ごした。転校先の国立学校とラ・ウニオン校との学生の価値観や意識の違いを感じ、物に拘らない気楽な学生達の態度に好感を持ったのである。こうした価値観の違いについては、P1・P4・P5・P12・P13の4人は「特に感じない」のに対して、残りの10人は「違いを感じる」とい

う。具体的にどういう違いがみられるかというと、ペルーの人は「ずるい」「怠け者」「テーゲー主義」「リベラルな性格」「盗み」とあげられた。日系人は家でペルー人と対照的な「正直」「勤勉」「清潔」としてしつけられた為、その違いを強く感じているのである。しかし、必ずしもペルー人全員がそういうわけではない。何人かの対象者は、ペルー人が置かれている環境で生きる為の手段として身に付けた知恵であると理解し、同時に残念なことであると受けとめている。また、同じ日系人でも、ペルー人との違いというよりも日系人との違いを感じている人もいた。P3・P7・P12は、ペルー人の多い環境で生活し、彼らとの長い付き合いにより日系人との意識の違いを感じるようになったのである。それは、「グループに縛られた生き方」「考え方が狭い」「神秘な謎の文化に止まる」「率直に物を言わない」などがあげられた。これは1世が持ち込んだ、地縁・血縁的な絆の精神と「ペルーへ移民し、言語・文化・社会への適応の困難や1世の記憶に刻み込まれた反日運動の経験が日本人を固まらせる結果を生んだ」[2] 恐怖の記憶として残った反日運動がもたらした結果である。恐怖の記憶は日系人の政治参加への抵抗を生み出し、1990年のペルー大統領選挙の結果でも現れた。フジモリ氏が得た投票数は日系人の投票ではなく現地ペルー人の投票であった。今回の調査はそのことに関連する語りも得られたのである。

では、越境により彼らのアイデンティティがどういう変化を遂げたのかを以下で紹介する。現在の自己意識についてみると「微妙／半分半分」などのペルー人なのか日本人なのかと分からない人は14人中2人。自分自身は「日系人」と思っている人はP2・P9・P13の3人であった。しかし、ここでも「はっきりしない」「決めきれない」「中等半端」な立場を「日系人」というかたちで表わすケースはいくつもあった。はっきりと「ペルー日系人」としての自己意識を自覚しているのはP13の1人であった。このケースを分析してみると、8歳までペルーで暮らし、その後沖縄で生活している。幼い頃に来沖し1年もしないうちに一般的な会話ができるようになり、特に大きな問題も無く周囲に慣れるのが早かったという。学校では部活に入り、家族より学校の友達と過ごす時間が長かった為、気付かないうちに日本人化していった。小学校を卒業する頃、一度両親とペルーに戻る機会を得ている。ペルーに戻り、そこで過ごした経験から内面化していた民族的なアイデンティティが顕在化するのである。ペルーに戻って以来P13はそれまでの物の見方、人間関係や家族への姿勢が変わったという。母国で、ペルーの文化・習慣と再会し、民族的なアイデンティティを再認識したことによりペルー人として自覚をもつのである。また、以前のアルバイト先では米軍基地のラティーノと交流することで、更に自己意識をはっきりと意識するようになったという。それは、彼らと同じペルー人あるいはラティーノとしてではなく、「ペルー日系人」としての意識を強く持つようになったということである。P13は「ペルー日系人」であることを誇りに思っているのだという。沖縄で、他者との出会いによりアイデンティティが確立されたのである。P3・P5・P14の3人は「ペルー人」としての意識がある。14人中5人は「ウチナーンチュー／日本人」としてのアイデンティティを持っている。ひとりひとりを見てみると、P6は、沖縄での長い暮らしにより沖縄への愛着を持っている。昔、日系人の友人が多かったが、今はウチナーンチューとの付き合いが多い。好きな仕事をしながら教会で出会ったウチナーンチューの妻と幸せに暮している。P8は1世の方であり、ウチナーンチューの友人もいれば日系人の友人もいる。両方ともうまく付き合っ

ている。夫は同じ1世、ペルーで結婚して子供2人とともに引き揚げてきている。本人はウチナーンチューとの意識の違いを実際に感じながらも、ウチナーンチューとしてのアイデンティティを持っているのだという。P10は2世の方であり、息子と一緒に呼び寄せにより本土から沖縄にやってきた。P10はP8と同様で周囲との意識の違いや周囲からの外人としての扱いを受けるが、日本人としての意識を持っている。P11とP12は沖縄で沖縄の音楽や伝統芸能（祖父母の文化）との出会いによりウチナーンチューとしての自覚に芽生えたケースである。「世界人」と答えた方はP7、1人である。彼はペルーから日系社会とそれ程関わりを持たなかった。中学校からペルー人に囲まれて生活し、大学卒業後リマを出てチクラシヨ州などと転々と移動する。27歳の時ペルーからブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、エクアドルへ仕事の為に渡る移動の多い人生を歩んだ方である。移動先でペルー人である妻と出会い結婚し、2人の子供に恵まれている。P7のボーダーを超える人生から「世界人」としてのアイデンティティが芽生えたといえるのではないか。今回の調査では、越境によるアイデンティティの意識は様々であるが、ホスト社会で外国人としてみられるという経験からアイデンティティの変容をもたらされるのであった。

3．まとめ

沖縄に在住するペルー日系人の家族のあり方、友人関係、エスニック・ネットワークを生活様式としての基礎的な社会領域の場としてみてきた。彼らは、移動により「民族的アイデンティティが世代から世代への継承される重要な場とする＜家族＞」[3] のあり方は日本社会での時間的なゆとりのなさを家族の成員ひとりひとりの生活リズムをバラバラにし、家族においての文化継承を妨げているのである。他方では、治安の良さは個人を安心させ外での行動を多くさせる。家族と過ごせない分対象者はペルーからの従兄妹・親戚や日系人の友人と一緒に多くの時間を過ごす。このような、集まりは90年半ばまで存在したエスニック組織と違って、“気の合う”仲間や友人同士で誰かの家、海などと場所を特定せず集まるようになっている。その繋がりは日系人だけで固まるような閉鎖的なものではなく、沖縄の人も含む開かれたネットワークを築かれている。つまり、フォーマルなネットワークからインフォーマルなネットワークへと形を変えて沖縄の人を含む同胞の繋がりを維持しているのである。今回の調査では、彼らが足を運ぶ幾つかの共通の場所がみられた。こうして集まることで彼らは交流の場をつくり、民族的なアイデンティティを顕在化し、または獲得する。彼らのハビトゥスを発揮できる場を築きあげているのである。対象者のなかには、こうした場を通して民族的な体験をし、日系人としての民族的アイデンティティに目覚めたというケースもあった。また、獲得した民族的なアイデンティティを日系人の友人と過ごすことで維持されていることが分かる。しかし、日系人としての民族的なアイデンティティに芽生えるだけでなく、「ウチナーンチュー／日本人」としての民族的アイデンティティに芽生えた人もいる。「祖先との繋がり」においてウチナーンチューと一体化し、そのことに誇りを抱いて生きてきた人は、沖縄社会からの「外国人」としての眼差しがあっても、祖父母に聞いていた沖縄の音楽（三線）を聞き、懐かしさを感じ、心を揺さぶられる何かに弾かれ共感を覚え「ウチナーンチュー」としての自覚を持つのである。更に、「自分は何人と思っていますか？」という質問に対して、「自分はペルー人であり、日本人ウチ

ナーンチューでもある」多元的アイデンティティを指すはっきりした答えは無かったが、回答者のさまざまな表現からは、状況により自己意識を変えていったことが読み取られる。つまり、彼らは、「複数のアイデンティティの選択肢を持って状況によって使い分ける、社会的適応の為の<健全な選択肢>」[4] をしているのである。祖先の地で受け入れてもらえなくても、日系人はペルーで獲得したハイブリッドな文化を抱え、時には「ペルー人」、時には「ウチナーンチュー」、時には「日系人」のアイデンティティを戦略的に選択しながら沖縄社会で生活しているのである。

4．結論

以上で読み取ってきたように、グローバル化の進行により沖縄の社会構成員がはっきりと多様化しつつある。社会構成員の多様化が進むにも関わらず、ホスト社会の文化支配が持つ力はまったく緩まない。そのようななかでも、日系人は沖縄での長い暮らしにより「日本人と変わらない」行動様式を身に付け、地域や職場などでは日系人としての行動様式が成り立たない条件の下で戦略的に日本人と変わらないような行動様式をとりながら生活している。また、他方では、家族、友人関係やネットワークを通して、民族的アイデンティティを「『継承―獲得』『顕在―混在』」[5] させているのである。このようにして日系人は沖縄でホスト社会とは異なる文化の担い手として生活を営んでいるのだが、そのことと沖縄社会の文化状況が変わることとはイコールではない。日系人が自らの民族的アイデンティティを顕在化させられるのはあくまで私的な場でのことであり、地域や職場のような公的な場では潜在化させざるを得ないのが現状だ。ここに見られるように、ホスト社会の支配文化のメカニズムは、自らの文化の優位性を壊さない仕組みを作りあげているのである。

注

1) 谷 富夫「定住外国人における文化変容と文化生成」宮島 喬・加納弘勝編『国際社会② 変容する日本社会と文化』東京大学出版会、2002 年、201～202 頁。
2) ビクトル・ヤマモト「報告二 フジモリ政権と二世の政治参加」柳田利夫編『リマの日系人』1997 年、明石書店、344～347 頁を参照。
3) 谷、前掲論文、202 頁。
4) 谷、前掲論文、206 頁。
5) 谷、前掲論文、201 頁。

（くによし さおり・人文社会科学研究科院生・国際社会学）